

学生への科学的和文作文法指導

滋賀県立大学 特任教授 倉茂好匡



私は前任校(北海道大学大学院地球環境科学研究科)在任中、多くの大学院生に対する論文執筆指導をしなくてはなりません。大学院では、学生は修士論文・博士論文を書かなくてはなりません。また博士後期課程の大学院生は、投稿論文を書かなくてはなりません。その場合、いわゆる「理科系の作文技術」を用いなくてはならない。うえ、「章立て」および「パラグラフライティング」にも十分に注意を払わなくてはなりません。そのため、これらの観点での作文法指導をしなくてはならないのです。

しかし、学生たちはこのような「文章の書き方」には無頓着です。そのため、彼ら彼女らが書いた論文第1稿に相当するものを見ると「とてもではないが、読めたものではない」文章になっていることがしばしばです。そして、その学生の用いているデータを参考にしながら赤ペン添削でもしようものなら、「添削されたとおりに書き直す」ことばかりで、「自力で文章を書ける」ようにはなりません。

また、前任校時代には、最も多い年で一度に17名分の修士論文執筆指導をしなくてはなりません。この全員一人一人の論文に赤ペン添削をしている時間的余裕など、とてもありません。それどころか、学生の書く「文」には文法的なエラーも多く、「なぜ間違っているか」をしっかりと説明しない限り、「僕には十分に意味がわかります。この文の意味が分からないのは、倉茂さんがバカだからじゃないんですか?」と学生に言われてしまう始末でした。

そこで、私は論文執筆予定の学生たちを集めて、「科学的和文作文法」の演習授業を3日間集中講義形式で行うようになりました。この教育活動は滋賀県立大学に移ってからも続けていて、2020年度からは滋賀県立大学大学院専攻共通科目として開講するようになりました。この演習の教育効果は非常に大きく、多くの学生が飛躍的に作文力を伸ばすとともに、多くの卒業生が「大学で学んだ技術のうち、社会に出てから最も役立っている技術だ」と言ってくれています。しかも、その時に実際に指導している様子を元に、2冊のテキスト(倉茂, 2011; 倉茂, 2019)を出版することができました。私の行っている科学的和文作文法演習の内容を知りたい方には、ぜひこれらをお読みいただきたいと思います。

さて、今日このコラムでご紹介したいのは、学生に「文法的に正しい文」を書かせる指導法に関してです。なぜなら、この指導に使用している知識の多くは、私が成蹊中学校在籍時に、「文法」の時間に学んだものだからです。

私は1971年4月に成蹊中学校に入学しました。そのころ、成蹊中学校の国語は「国語」「文法」「作文」の3科目に分けてカリキュラムを組んでいました。そして、この学年担任の一人が横地孝先生で、私は中学時代の3年間、「文法」を横地先生に教えていただきました。この「横地式国文法指導法」が、私が学生に「文法的に正しい文」を書く指導方法の根幹をなしているのです。

横地先生の国文法指導法は非常に系統的でした。そのうえ「覚えるべきものを覚える方法」もしっかり教えてくれました。そのため、多くの生徒は「現代日本語の動詞・形容詞・形容動詞の活用」をきちんと理解していたし、「連用修飾語と連体修飾語の見分け方」も文法的知識を元にしっかりと理解していました。特に現在、学生への作文指導時に重宝しているものが「横地式助動詞指導法」です。「横地式助動詞指導法」のおかげで、生徒たちは「日本語の助動詞」をその接続類型(未然形接続か連用形接続かなど)ごとに完全に暗記していたのみならず、「各助動詞の意味およびその活用」もしっかり暗記していました。もちろん、他の品詞



横地 孝先生

についてもしっかりと頭の中で整理することができました。

実際に私が学生に指導している事例をいくつかご紹介しましょう。私がいま関西の大学に勤務しているためでしょうか、学生が書く文には、つぎのような「文法的に間違っただ文」がよく見られます。

- ・ 彼は友人に弁当を食べさす。
- ・ 彼は友人に弁当を食べさし、そのままだまって立ち去った。

下線を付した部分が「文法的に誤っている」ところですが、ただ、この表現は関西では話し言葉としてあたりまえのように使用されています。でも、標準日本語としては文法的に誤っています。

「食べさす」「食べさし」のどちらも「～させる」の意味を持っています。この意味を「使役」といいます。そして、現代日本語で使役を意味する助動詞には「せる」「させる」の2つがあります。ただし、「せる」は「五段活用動詞」あるいは「サ行変格活用動詞」の未然形に接続します。一方、「させる」は「上一段活用動詞」「下一段活用動詞」「カ行変格活用動詞」の未然形に接続します。ところが、「食べさす」「食べさし」の元になっている動詞は「食べる」で、この動詞は「バ行下一段活用」をします。したがって、この動詞の未然形に接続できる使役の助動詞は「させる」でなくてはなりません。「食べる」の未然形は「食べ」です。そして、助動詞「させる」は「下一段活用型」の活用をします。前者の場合は終止形、後者の場合は連用形でなくてはなりませんから、それぞれ以下のように修正されなくてはなりません。

- ・ 彼は友人に弁当を食べさせる。
- ・ 彼は友人に弁当を食べさせ、そのままだまって立ち去った。

学生によっては『「食べる」は自動詞で、『食べさす』は他動詞です』と主張します。たしかに、たとえば「集まる」という自動詞に対し、「集める」という他動詞が存在します。しかし、「食べさす」「来さす」などは、残念ながら標準日本語の他動詞としては認識されていません。現状では、あくまでも「方言」です。

まったく別の種類の誤用例をしめします。次の例は、テレビ番組などで毎日のように耳にします。しかし、下線を付した部分は、「標準日本語としては誤り」です。書き言葉での使用は認められません。また、学生が企業の採用面接を受ける前には「こういう言葉遣いはするな」と指導するものの1つでもあります。話し言葉としても「公式な場では使えないものだからです。

- ・ なので、私はこの仕事を引き受けることにした。

「なので」が文頭で使用されています。品詞としては「接続詞」の形をしています。しかし、どの文法書を見ても、「なので」という接続語は見当たりません。「なので」という形の使用が認められるのは、以下の2つの事例に相当する場合だけです。

- ・ 部屋は静かなので、落ち着いて寝ることができる。
- ・ 今日は大雨なので、車を慎重に運転することにした。

「ので」は「接続助詞」といつカテゴリーに入る助詞です。そして、「ので」は「用言(動詞・形容詞・形容動詞)の連

体形」あるいは「助動詞の連体形」に接続するという性質を持っています。上記の例の場合、前者は「静かだ」という形容動詞の連体形「静かな」に接続助詞「ので」が接続した形です。後者の場合、「大雨な」の部分が「大雨」という名詞に「だ」という助動詞が付いた形になっており、この助動詞「だ」の連体形「な」に接続助詞の「ので」が接続した形になっているのです。

ところが、「なので」を単独で使用してしまうと、これは「助動詞の連体形の『な』に、接続助詞『ので』が接続したもの」になってしまいます。1つの文節の中が「付属語」だけで構成されてしまっています。日本語では、文節の冒頭には必ず「自立語」がなくてはなりません。つまり、「なので」という語だけで文節を作ることはできません。だから、文頭で「なので」を使用することはできないのです。

意味が何通りにも読み取れてしまう文を書く学生もいます。次の事例を見てください。

- ・ 白いポケットのきれいなユニフォームを着た。

この文を読んで、皆さんはどういうユニフォームを想像したでしょうか。「ポケットの色が白く、全体的にきれいなユニフォーム」でしょうか。「ポケットがきれいで、しかもそのポケットの色は白いという特徴をもったユニフォーム」でしょうか。それとも「白いユニフォームに、きれいなポケットがついている状態」という意味でしょうか。この文を何回読んでも、このいずれかの意味に断定することはできません。「科学的和文」では「だれがどのような読み方をしても、一通りの意味にしか読み取ることができない」文を書かなくてははいけません。したがって、上記の例のような文を書くことはできません。

なぜこんなことが生じるのでしょうか。これも文法的に説明することができます。文の冒頭にある「白い」は形容詞の連体形です。したがって、文中で「白い」よりも後ろにあるいずれかの名詞を修飾します。「白い」の後ろには「ポケット」「ユニフォーム」という2つの名詞があります。そのため、「白いポケット」「白いユニフォーム」のいずれの意味にも読み取れてしまうのです。

さらに、「ポケットの」の「の」という助詞の意味も2通り解釈できます。「の」という助詞には「主格・同格・連体修飾格・準体格」という4つの用法がありますが、この用例の「の」は「主格」とも「連体修飾格」とも読み取れるのです。「ポケットの」の「の」が「主格」ならば、この「の」を「が」に置き換えることが可能なので「ポケットがきれいなユニフォーム」というつながりになり、「ポケットがきれいだ」という意味になります。一方、これが「連体修飾格」ならば、これより後ろの「ユニフォーム」という名詞を修飾するので「ポケットのユニフォーム」という修飾関係が成立します。

2通りの意味に解釈できてしまう箇所が1文に2つもあるのですから、「正確な意味」を読み取れるはずなどありません。私は、こういうめっちゃめっちゃ構造の文を学生が書いた場合、まず「文法的にダメな理由」を説明します。そのうえで、「その文で述べようとしている内容を分割し、2文で書いてみよ」と指導します。そうすれば、以下のように書き換えることができます。

- ・ 白いユニフォームがある。このユニフォームには、きれいなポケットがついている。
- ・ きれいなポケットがついているユニフォームがある。このポケットは白い色をしている。
- ・ きれいなユニフォームがある。このユニフォームには白いポケットがついている。

内容によっては「一文で書き換える」ことも可能ですが、科学的作文初心者の学生には、「情報を精査して2文に分けよ」と指導したほうが「確実に書き直せる」近道になるようです。

このコラムで紹介した日本語文法の知識のほとんどは、前述のとおり、私が成蹊中学校在学中に獲得したもので

す。ただ、正確を期すために、「中学生用の国文法参考書」を傍らに置き、場合によってはその内容を示しながら、学生に指導しています。でも、それができるのも中学時代に国文法の知識を系統立てて頭に入れることができたからです。一方、学生たちのみならず、同僚の先生方でも「日本語文法」を理解している方は少ないのが現状です。私は、成蹊中学校で国文法をしっかりと学ぶことができたことに対し、本当に感謝しています。

成蹊小学校長の跡部清先生に、本稿の内容点検をしていただきました。記して感謝いたします。

引用文献

倉茂好匡(2011)環境科学を学ぶ学生ための科学的和文作文法入門。滋賀県立大学環境ブックレット5、サンライズ出版、95p。

倉茂好匡(2019)看護学生のための科学的作文レッスン。医学書院、118p。

著者のプロフィール

倉茂好匡(くらしげ よしまさ)

滋賀県立大学 学生支援センター 特任教授 / 成蹊学園サステナビリティ教育研究センター客員フェロー

成蹊中学・高等学校卒業後、北海道大学理学部地球物理学科卒業、同理学研究科地球物理学専攻博士前期課程修了。成蹊中学・高等学校教諭として勤務ののち、北海道大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士後期課程修了。北海道大学大学院環境科学研究科助手、同地球環境科学研究科助手、滋賀県立大学環境科学部助教授・教授、滋賀県立大学理事兼副学長を経て、2021年より現職。

専門は地形学。